

いのちの花

藤本 ゆきな 愛知県名古屋市長 三十二歳

「いっしょに育ててみようよ。」

空いたプリンの容器に、小学生の娘が朝顔の芽を持ち帰ってきた。しかし、コロナ禍で同じ障がい・病とたたかう仲間と語らう場が減り、塞ぎ込んでいた私は、とてもそんな気になれず、それを断ってしまった。娘と夫は私を責めなかった。かわりに、私の席からよく見えるベランダに、その芽を植え替えてくれた。

「葉っぱが大きくなってきたよ。」

「そろそろ棒をささなくちゃ。」

「あ、咲いた！赤紫だ！」

「どうして見えないのに棒に巻きつけるのかな？」

娘は毎日水をやりながら、私に朝顔の成長を伝えてくれた。それに応える内、気持ちは少しずつ前向きになり、家族との会話が増えていった。開けられたカーテンからさす陽が、陽に照らされてキラキラと輝く花や葉が、私の心を少しずつ暖めてくれるようだった。

萎れた花を、大事そうに拾う娘。集めて後で色水にするらしい。どんな形でも、さいごまでその美しさを楽しむ方法はある。娘と朝顔から

学んだことだ。

私も私を諦めない。

今日も美しく、生きていきたい。